香曽我部義則先生の今月のカルテ⑤

慢性痛とペインクリニック

最近、病院・医院で目にするようになってきた「ペインクリニック」―。痛みに効果的といわれているけど、どんな治療法なのか、梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曽我部義則先生に解説していただく連載コラム。第５回の今月のカルテは「腰痛〈その４〉変形性腰椎（ようつい）症」についてです。

変形性腰椎症は加齢（老化）から生じるのが一般的。老化現象（変性）は骨（腰椎）の変形という姿をとります。しかし、高齢の方だけに変形が生じるわけではありません。太った人や、若い時から腰に負担をかける仕事をしてきた人や、重量挙げ、ラグビーなど激しく腰合は一般の人より早く骨の変形が起こります。さて骨が変形してくるの圧力吸収装置（クッション）の力が減少すると周囲の組織を痛めやすくなり筋肉疲労も起こりやすくなります。椎間関節にも過度の力が加わることで痛みが出やすくなります。変性が進むと、椎体に骨棘（こっきょく）と呼

痛みを伝える神経と運動神経を一時的にブロック

ばれる角を思わせるような棘（とげ）が形成されます（図１）。骨棘が神経を圧迫するように症状が生じてきます。

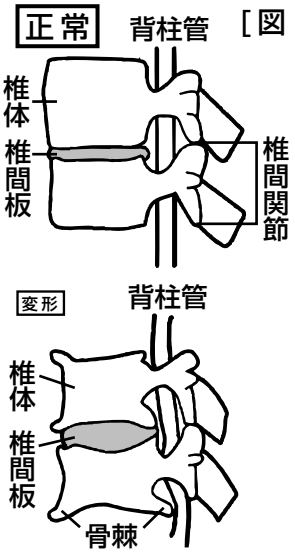
変性が進むと椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄といった状態になります。変性が軽い場合は筋肉疲労が主体ですから、トリガーポイント注射が効果を示します（連載第２回）。椎間関節の負担が大きくなれば、治療はぎっくり腰の治療でお話した椎間関節ブロックが必要となります（同第３回）。しかし、強い腰痛は椎間関節ブロックで消失しても重だるい腰痛が続くこともよくあります。これは主に椎間板に由来する痛みで硬膜外ブロックという方法で痛みを減少させることができます。硬膜外は脊髄（せきずい）神経の外側にあるスペースで、局所麻酔薬をこの部分に注入。痛みを伝える知覚神経と連動神経を一時的に感じにくくさせ（ブロック）、痛みに密接に関連する交感神経も同時に休ませます。交感神経を休ませると血管が拡張し、血流が増加。そのため痛みを出す物質を洗い流し、局所の栄養状態を改善する助けとなります。

このブロックを受けると約1時間痛みが消失し、足がポカポカと温かく、筋肉の緊張も緩んできます。これを繰り返すことで痛みの悪循環を絶ち徐々に痛みが減少してきます。

次回は、「脊柱管狭窄（せきついかんきょうさく）症」についてです。

■メモ　問い合わせ先☎(293)3355(代)日本ペインクリニック認定施設・梶木病院（西花尻1231～1）

香曽我部義則先生

■プロフィル　こうそかべ・よしのり　昭和54年３月岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長を経て今年４月１日から現職。日本麻酔学会専門医。日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、目本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属

［図１］